

中学校国語科における古典文学の授業研究

—生徒が学びを自分事として捉えられる古典の授業を目指して—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 猪股 楓

1. 研究動機と目的

中学校3年生を対象として平成25年度に行われた全国学力・学習状況調査によると、「古典は好きですか」という質問に「どちらかといえば、当てはまらない」と答えた生徒が34.7%、「当てはまらない」と答えた生徒は35.2%であった。この調査より、全体の約70%の生徒が古典に対してあまり良い印象を持っていないことが伺える。

また、現在の中学生の実態も探るべく、実習校にご協力をいただいて中学校2年生に同様の質問を行った。すると、「当てはまる」が2.4%、「どちらかといえば、当てはまる」が39.0%、「どちらかといえば、当てはまらない」が40.2%、「当てはまらない」が15.9%、その他・無回答が2.4%という結果が得られた。この調査によって、過半数を超える56.1%の生徒が古典は好きではないと思っていることが分かった。

これらの調査が示しているように、古典授業が抱える課題の1つとして生徒の古典嫌いが挙げられる。そこで、なぜ、古典に「嫌い」「苦手だ」という思いを持ってしまうのかを考察した。この考察を行うにあたって、同じ教職大学院の院生にこれまでに受けてきた古典授業に対する印象や思いの聞き取りをした。すると、「古典は外国語を学ぶ時と同じような感覚だった。」という声や「古典は自分たちとは違う遠い過去の出来事を学んでいるというイメージだった。」という声があった。これらの聞き取り等を踏まえて、生徒が古典嫌いになってしまう要因の1つに、生徒が古典授業での学んだことを自分事として結び付けるところに難しさがあるのではないかと考えた。

そこで、本研究では特に古典の文学的文章

を扱う授業に焦点を当てて、古典に対する生徒の苦手意識を減らすための授業づくりについて、生徒が学びを自分事として捉えるという側面から追究した。

2. 生徒が「自分事として考えられる」ために

生徒が古典授業での学びを自分事として捉えられるようにするためには、様々なアプローチが考えられる。その中でも今回は、「言葉にこだわって古典を読む」ということと「自己認識の在り方を問うこと」を目指した古典授業にする」ことの2つの側面から授業づくりを行った。

3. 「言葉にこだわって古典を読む」

加藤(2010)は日本語母語話者が古典を学ぶことに意味があると述べ、「大切なことは、古典を学ぶことを通して日本語話者として無意識であったり、気づいていなかったりした日本語のあり様に気づいたり、自分なりの発見をしたりすることである。」としている。そして、そのために1つ1つの言葉や表現に立ち止まって古典を読むことが必要と述べている。

古典授業の中には、現代語訳を生徒に暗記させるなど内容把握に重きを置く授業方法もある。しかし、加藤(2010)が述べているように、生徒が古典授業の学びを通して、普段当たり前に使用している現在の言葉について改めて見つめ直していくという授業が大切だと考える。そのために、本文・現代語訳の言葉や表現を授業で丁寧に扱う必要がある。また、生徒が古典の学びから新しい気付きや発見ができるようにするために、古典と自分との繋がりを意識させることも必要である。

4. 「自己認識の在り方を問う」古典授業

(1) 「予測が困難な時代」を生きていく

平成 29 年度 7 月告示の学習指導要領には、「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。」とある。これから生徒たちは、この「予測が困難な時代」を生きていかなければならないことが示唆されている。同時に学校教育では「予測が困難な時代」を生きていくために必要な資質・能力として「生きる力」の育成が求められている。

「生きる力」の中で着目したのは「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の滋養）」である。「予測が困難な時代」では、世界中の多様な背景を持つ人々と協働する機会がさらに増えていくだろう。この「予測が困難な時代」を生きていく生徒たちにとって、学びを通して自分自身と社会や世界・他者との関わり方を見つめ直す力を身に付けることが特に重要になると考えた。物事や対象の捉え方をはじめとして、普段は当たり前として取り上げないことを学びの中で生徒自身が改めて問い直していく授業づくりを目指す。

(2) 「自己認識の在り方を問う」とは

先行研究を調査すると、田中(1997)(2001)や須貝(2017)の考え方に可能性を見出した。一般に田中・須貝の自己認識を問う考え方は近代以降の文学作品において可能とされているが、本研究ではこの考え方を古典の文学作品に活用しようと考えた。なぜなら、ある種の文学的文章を読み解くことを通して、自己認識を問うことができるためである。

須貝(2017)は、私たちの捉え方は「〈主体〉と〈主体が捉えた客体〉と〈客体そのもの〉の三項で捉える世界観認識」であり、「〈客体そのもの〉は到達不可能な、予測不可能の《他者》」であると述べている。私たちは他者などの対象を捉えようとする時に、自分のものの見方

や考え方が入り込んだフィルターを通じた状態で捉えてしまうという問題がある。このフィルターは自分にとって都合のいい偏った情報や既知の情報などによって形成されるため、フィルターを通して捉えた対象は「対象そのもの」ではなく、自分のバイアスがかかった対象ということになる。

私たちが自分のフィルターを完全に外した状態で対象を捉えることや〈客体そのもの〉の捉えに至ることはできない。しかし、この認識の問題に気付いて自分の捉え方を様々な角度から問い直し続け、より〈客体そのもの〉に近づけていく姿勢は非常に価値あるものと考えられる。「予測が困難な時代」の中で、生徒たちはこれから未知の現象と出会うであろう。そして、未知と出会った時に自分の認識世界を超えて、対象の本質を捉えようとする態度が求められる。自分の世界観認識に固執せず、多角的・多面的な見方や考え方を使って自分の捉え方を更新し続け、他者や社会との関わり方を模索できる姿勢を授業で育成したい。

(3) 「自己認識の在り方を問う」ために

学級の仲間が同じ文学的文章を読むという国語科の授業だからこそ、読み手によって異なる多様な解釈(読みの多様性)の存在に気付かせることができる。その方法の1つとして、昨年度までの研究の中で、他の生徒や教師と積極的に読みの交流を行うことに効果があると見出した。読みの交流を通して生徒たちは自分には無かった新しい考えに気付くことができる。また、読みの交流で多様な考えに触れる経験によって、生徒たちが自分とは異なる考え方に出会った時に一方的に排除しようとするのではなく、異なる考えも受け止めて考えていこうとする態度も育成することができる。

よって、本研究における「自己認識の在り方を問う」ための具体的な手立てとして、古典の「文学的文章」を扱うことを生かし、読みの交流を積極的に取り入れるように工夫した。そして、授業づくりでは読みの交流によって生

徒が読みの多様性に自ら気付くことができる機会を作るとともに、自分の読みを問い直していききっかけになるよう意識した。

5. 授業実践について

ここでは授業実践の概要と単元計画についてまとめる。

(1) 実践の概要

対象：山梨県内の公立中学校

第2学年3クラス（計85名）

日時：2020年9月 全4時間

教材：「音読を楽しもう 平家物語」（1時間）

「扇の的—「平家物語」から」（3時間）

（光村図書出版『国語2』より）

(2) 単元計画

単元名：諸本や他の人と読みを交流することを通して自分の読みを問い直す

単元目標：

〔知識及び技能〕

(3)ア 語り継がれてきた「平家物語」のよさを知るとともに、独特の調子やリズムの特徴を生かして音読することによって、古典の世界に親しむこと。

(3)イ 現代語や語注を手掛かりにしつつ、本文も意識しながら読むことによって、登場人物が生きる世界の生き方や考え方をすること。

〔思考力・判断力・表現力等〕

C-イ 表現や構成に着目して登場人物の心情を考えたり、行動の意味を考えたりすることを通して内容を柔軟に解釈すること。

〔主体的に学習に取り組む態度〕

異なる角度から物語を読み直したり、他の人の考えも受け止めたりして、自分の読みをよりよいものにしようと問い直し続ける態度を持つこと。

【言語活動例 中2】

C-イ 物語を読んで考えたことを他の人と伝え合う活動。

単元計画（表1）

時	目標（◎）と学習活動（・）
1	教材：「音読を楽しもう 平家物語」 ◎構造を捉えて、冒頭部分にはどのようなメッセージがあるのか考える。 ・「平家物語」について知る。 ・本文と現代語訳を交互に音読する。 ・対句表現探しを行う。 ・現代文を参考にしながら冒頭部分に込められた意味を考える。
2	教材：「扇の的—「平家物語」から」 ◎あらすじを捉え、扇の的に挑む与一の心情を考えることができる。 ・物語世界を知る。 ・与一と扇の距離を実際に見てみる。 ・与一を取り巻く状況を本文の言葉や表現から確認する。 ・与一の立場に立って、扇の的に挑む心情を考える。 ・各諸本における与一が神仏に祈願する場面の書かれ方を知る。
3	教材：「扇の的—「平家物語」から」 ◎危険を冒してまで弓を拾いに行った義経に対する自分の考えをまとめることができる。 ・与一が扇を射た場面を捉える。 ・「年五十ばかりなる男」が舞を舞った理由を考える。 ・弓流しの場面を読んで、「義経は弓を拾いに行ってもよかったと思うか、拾いに行かない方がよかったと思うか」、自分の意見と理由を考えて交流する。
4	教材：「扇の的—「平家物語」から」 ◎諸本を読んだり他の人と考えを交流したりすることを通して、自分の読みにには自分の先入観や価値観が入り込んでいるということに気付き、読み手によって意味の取り方に多様性があると知る。 ・与一が男を射た場面を捉える。

<ul style="list-style-type: none"> ・「あ、射たり。」は誰がどういう意味で言ったのか、自分の考えを交流する。 ・各諸本における「あ、射たり。」に該当する場面の書かれ方を知る。
--

6. 本授業における諸本の活用

「平家物語」の魅力の1つに多種多様な諸本の存在が挙げられる。松尾(2006)によると「平家物語」の諸本は、「情報を多く盛り込み、言葉も多く費やして表現しようとしている」読み本系と、「より少ない言葉で、叙事と抒情の緊張関係を保ちつつ、感動を生み出す」語り本系に大きく分けられるという。また、読み本系は「源平盛衰記」をはじめとしたグループと「四部合戦状本」をはじめとしたグループに分けられ、語り本系は八坂系、一方系、両系の性格を持つ本に分けられるとされている。このように「平家物語」の諸本は、物語の大筋は同じであるものの、諸本によって異なる言葉や表現、解釈の多様性を見ることができるといふ大きな価値がある。

この価値を生かして、本授業実践では諸本を授業に取り入れることを計画した。諸本を活用することで生徒に様々な言葉や表現を使って書かれている「平家物語」があることを知ってもらいたいと考えた。そして、教科書に掲載されている本文だけが「平家物語」というわけではなく、昔から様々な本文が伝わってきた中で、今日まで受け継がれてきた「平家物語」の魅力を生徒に気付かせたい。

実際の授業実践においては2時間目と4時間目で諸本を扱った。教科書で場面把握を行った後に、諸本から該当場面を抜き出して現代語訳を付けたものを生徒に配布する形で諸本を紹介した。なお、調査の結果、教科書に掲載されている本文は、語り本系に属する八坂系の中院本であると分かった。

7. 各時間の授業について

(1) 1時間目

本時では、生徒に古典と現代の関わりがあると気付かせることと、古典に対する生徒の

これまでの捉えを揺さぶることを意識して授業を行った。これは、単元最初の本時において生徒の教材への興味や関心を高めるとともに、生徒が抱く古典への苦手意識をなるべく和らげたいと考えたためである。

まず、古典授業には「古典と自分との繋がりが見えにくい」という問題があると考えたため、古典と今の生活がつながる部分を授業の各所に散りばめた。具体的には、「平家物語」について知る活動で琵琶法師をストリートミュージシャンに例えて説明するとともに、当時の人々にとって平曲は生徒に挙げさせた現在の娯楽のように魅力的なものだったと説明した。また、「祇園精舎の鐘の声」から始まる「平家物語」の冒頭部分と、現在人気の曲に同じように対句表現が使われていると気付かせてから対句表現探しを行うようにした。「平家物語」の冒頭部分も現在人気の曲と同じように対句表現の工夫がされていることで調子やリズムが魅力的なものになり、人々に親しまれていることを伝える狙いがあった。

次に、生徒に古典の良さに気付いてほしいと考えて、生徒の古典へのこれまでの捉えを揺さぶる工夫をした。具体的には、本文と対応する現代文を交互に1人ずつ交代で読むという音読方法を取り入れた。本文と対応する現代語訳を交互に読むことで、これまで語り継がれてきた「平家物語」本文の独特の調子やリズムが明確になる。音読後には生徒に、古典と現代語訳ではどちらが読みやすかったか聞いたところ、各学級の過半数の生徒が「古典の方が読みやすかった。」と回答した。

(2) 2時間目

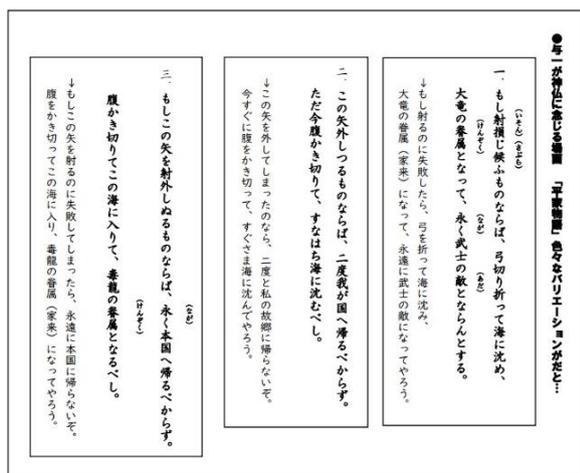
本時では、言葉や表現にこだわって教科書を読むだけでなく、実際に体験する活動を取り入れた。

授業の導入では前時に学習した「平家物語」の冒頭部分について、平曲のCDを聞かせた。実際に平曲を聞かせることで前時の学習の定着を図るとともに、平曲の独特の語りや琵琶の演奏を味わってほしいという思いがあった。

展開では、教科書を読むだけでは那須与一が置かれている不利な状況を掴みにくいと考えたため、廊下に出て与一と扇の距離（約 72メートル）を実際に見る活動を行った。事前に廊下の距離を測っておき、授業では廊下の端で広げた扇を生徒は廊下の反対端で見て、与一から見た的の小ささを体験した。

また、本時では言葉や表現にこだわって読むことも生徒に意識させた。与一と扇の距離を体験した後、与一が置かれている状況をさらに詳しく読み取らせるために、本文の表現から該当部分を抜き出させる活動を行った。他にも、与一が神仏に祈願する場面において、屋代本・長門本・延慶本の3つの本文と授業者作成の現代語訳を配布した。生徒と共に諸本を読み、どの諸本も与一は命懸けで扇を射ようとしていることが分かると確認した。

生徒に配布した資料



(3) 3時間目

本時では、義経が危険を冒して弓を拾いに行つた弓流しの場面を読み、「義経は弓を拾いに行つてよかったと思うか、拾いに行かない方がよかったと思うか」という問いに対し、自分の意見と理由を考えさせた上で、読みの交流を行った。この時、理由を書くにあたって生徒には、本文の言葉や表現を根拠にして明確に示すよう指示し、言葉や表現にこだわって読むことを意識させた。

また、読みの交流では感染症対策に配慮して近くの席の4人～5人と交流させた。本時の

読みの交流では、生徒が新しい読みや自分と違う読みに出会うことを通して、読み手によって様々な解釈があることに気付かせる狙いがあった。そのため、最初に生徒が1人で自分の意見と理由を考える時に「この問いに正解はなく、様々な考えがあつてよい」ということを強調して伝え、机間巡視では「多様な考えがあつて興味深い」と全体に声掛けをするなど、生徒が安心して自分の考えを自由に書ける環境づくりを行った。

(4) 4時間目

本時では与一が五十ばかりなる男を射る場面を読んで、本文の「あ、射たり。」と言ふ人もあり、また、「情けなし。」と言ふ者もあり。」における「あ、射たり。」は誰がどういう意味で言ったのかを考える活動を行った。この学習課題は以下2つの意図から、生徒の自己認識の在り方を問う問いとして設定した。

1つ目は、教科書の現代語訳に訳者の読みが入り込んでいると気付かせることである。「あ、射たり。」は教科書の現代語訳では「ああ、よく射た。」となっている。直訳ではなく、「よく」という言葉が付け足された意識になっていると考える。これを生徒に考えさせることで、教科書の現代語訳に訳を付けた人のフィルターが通されていることを気付かせたいと考えた。

2つ目は、言葉や表現に敏感になり、ことばにこだわって読む姿勢を生徒に持たせることである。本文の会話では「与一目をふさいで、南八幡大菩薩、」や「伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、「御定ぞ、つかまつれ。」のように主語が明記されていることが分かる。しかし、「あ、射たり。」「情けなし。」のみには主語の記述がない。そこで、このことを生徒に気付かせるとともに、なぜ「あ、射たり。」「情けなし。」のみに主語が書かれていないのかを生徒と考えることにした。

本時の学習課題を考えるにあたっては、最初に生徒個人で自分の考えを考えさせた後、近くの席の4～5人と互いの考えを交流させた。その後、「あ、射たり。」のみに主語の記述がな

いことと、現代語訳に入っている「よく」の表現について全体で考えさせてから最終的な自分の考えをまとめさせた。最後に、延慶本・四部合戦状本・長門本から取り上げたこの場面の本文と授業者作成の現代語訳を紹介し、諸本によって主語が異なるものや、違う表現で書かれているものがあると確認した。

8. 結果と考察

ここからは、生徒の各授業時間の学習感想から実践について考察していく。

(1) 各時間の生徒の授業感想から

1 時間目の学習感想から抜粋

- ・ 同じようなリズムを使っていて、読みやすい。－①
- ・ 現代文と古文では確かに 古典のほうが読みやすいなと思いました。－②

①のように古典と自分の関わりについて書かれた学習感想が見られた。このことから、授業で実践した工夫は、生徒に古典「平家物語」と自分との繋がりを気付かせる効果があったと考える。また、対句表現探しを行ったことで、生徒が「平家物語」の冒頭部分の独特の調子やリズムについて、構造面から考えられていたことが伺える学習感想もあった。

さらに、②のように古典の良さに気付いた学習感想も見られた。ここから、古典の文章に対するイメージを覆すための音読の工夫は、生徒が「平家物語」独特の調子やリズムの良さに自分から気付ける効果があったと考える。

2 時間目の学習感想から抜粋

- ・ わかりやすかったです。 まとがけっこう ちいさかったです。－③
- ・ もし自分が与一の立場だったらこわくて射れないと思った。－④
- ・ こんなに難しいことは私は絶対にできないけど、与一はどうなったのか、早く続きが見たいです。－⑤

③のように与一から見た扇の的の小ささについて書かれた学習感想が多く見られた。授業においても、生徒たちは興味深そうにして

この活動に参加している様子だった。また、④⑤のような記述から、与一の立場に立って心情を考えることができた生徒がいたと分かる。実際に体験する活動に加えて、言葉や表現にこだわって読むように意識させたことで、与一が置かれている不利な状況がより明確に浮かび上がり、生徒の読みを深められたのではないかと考える。

また、諸本の紹介に関する学習感想を書いた生徒も見られた。

- ・ 平家物語はバリエーションが多いというのにびっくりしました。－⑥

この生徒は諸本の紹介から「平家物語」が持つ、言葉や表現、解釈の多様性に驚きを感じたのではないかと考えられる。

3 時間目の学習感想から抜粋

- ・ 弓を拾いに行つてよかったと思つたけれど、拾いに行かない意見をきいて どっちがいいか悩みました。－⑦
- ・ 考えるのが難しかったけど、みんなの意見を聞いて納得できた。 色々な考えが知れた!－⑧

⑦のように弓流しの読みの交流を通して、新しい意見や自分と違う意見に出会い、自分の考えがさらに深まっていったことが伺える学習感想が見られた。また、⑧のように読みの交流から人によって異なる考えに気付き、多様な考えがあることに面白さや楽しさを感じたことが分かる学習感想も見られた。これは生徒が安心して自分の考えを自由に書ける環境づくりを工夫したことによって、読みの交流時に生徒の多様な考えを引き出すことができたためと考える。

また、読みの交流が盛り上がったグループの生徒からは⑨のような感想もあった。

- ・ 義経の弓についてももう少し議論したかった。－⑨

これまでの学習で武士にとっての弓の大切さについて扱ったことがあり、このグループではその時の学びを生かして白熱した議論が進められていた。このように、これまでの学び

を生かした議論ができた生徒や読みの交流そのものに興味深さや楽しさを感じていた生徒もいたことが分かる。

4 時間目の学習感想から抜粋

- ・色々な人の意見があって答えもないので、難しかったです。だけど、色々な意見があるからとても面白かったです。
- ⑩
- ・読む人が違うと意味も変わって面白いと思いました。班の皆やクラスの皆と考えを共有して楽しかったです。⑪
- ・古典は昔の物だけは知っていたけど、そんなに奥が深いなんて知らなくて読んでいて楽しかった！その場所がどうなっているのかを字だけで表現していてすごかった！⑫

⑩のように、読みの交流を通して人それぞれの様々な考えがあることを知り、違いを受け止めながらお互いの考えを聞き合うことができたことが分かる学習感想があった。また、⑪のように、諸本も自分たちと同じような読み方をしている面白と感じた生徒も見られた。他にも⑫のように、言葉で表現する魅力に自分の力で気付けた学習感想も見られた。

授業では本時の学習課題には難しさを感じていた生徒の姿も見られたが、考えを交流する活動によって自分の考えが持てるようになった生徒や自分の考えがより深まった生徒がいた。加えて、言葉や表現にこだわって読むように意識させたことで、1つ1つの言葉や表現に立ち止まって考えられるようになった生徒も見られるようになった。

(2) 古典へのイメージ調査から

授業実践の開始前に「古典は好きですか。」という質問と「古典のイメージを漢字 1 字で表すと？その理由は？」という調査を生徒に行った。そして、授業実践の終了時に再度「古典のイメージを漢字 1 字で表すと？その理由は？」という調査を生徒に行った。

分析は配属学級 25 人を対象にした。まずは、

授業前に回答した漢字と授業後に回答した漢字が異なっている生徒の人数を調べた。これは、授業前と授業後で回答した漢字に変化がある生徒には本授業実践が生徒の意識に影響を与えられたと考えられるのではないかとしたためである。結果、授業前と授業後で異なる漢字を回答したのは、25 人中 15 人であった。

異なる漢字を回答した生徒の選択理由 一例

- ・流：現代文とは違うけれど、流れるようなリズムが綺麗だから。
- 深：読む側によって、意味の理解の仕方が変わっていて、本来の意味も読者に委ねるような形もあるから。⑬
- ・分：あまり分からないので。
- 古：古いイメージだから。⑭

しかし、授業前と授業後で異なる漢字を回答した生徒の授業後における漢字の選択理由を見ていくと、⑬下線部のように、本単元の学びを踏まえた記述がある生徒が 12 人、本単元の学びを踏まえた記述が無い生徒が 3 人いることが分かり、単純に漢字の変化だけで判断するのは不十分だと考えた。

同じ漢字を回答した生徒の選択理由 一例

- ・難：読み方が分からなかったり、今の言葉と違って難しいから。
- 難：読み方が分からないのとか沢山あるし、考え方によって意味とか誰が言ったとか変わって難しいと思ったから。⑮
- ・嫌：普通の文よりも難しく、何を言っているか分からない時があるから。
- 嫌：何を言っているか分からない。とにかく大嫌い。⑯

そこで、授業前と授業後で同じ漢字を回答した生徒の、授業後における漢字の選択理由も分析することにした。授業前と授業後で同じ漢字を回答したのは、10 人であった。その内、⑮下線部のように、授業後の漢字の選択理由に本単元の学びを踏まえた記述がある生徒が 6 人、⑯のように本単元の学びを踏まえた記述が無い生徒が 4 人いた。

以上より、授業後における漢字の選択理由の中に本単元での学びを踏まえた記述が見られる生徒については、本授業実践を行ったことで生徒の古典への意識に多少の影響を与えられたのではないかと考える。また、⑮⑯の生徒のように「難しい」と感じる体験も大切と考えるが、授業では生徒が自分から学びに気付ける手立てを再考する必要がある。

そこで⑯のように、授業後における漢字の選択理由の中に本単元での学びを踏まえた記述が無かった生徒を取り上げて、その生徒たちが各授業時間でどのような学びをしたのかを分析した。

対象生徒の2時間目の授業感想から抜粋

- ・四十間は72メートルですごく遠かった。
-⑰
- ・与一は不利な状況なのに自害すると言って扇の的を射抜くって勇気があるなと思った。-⑱

⑰の学習感想から、実際に与一と扇の距離を体験した活動が強く印象に残ったことが伺える。また⑱のように、与一の置かれている状況を読み取って心情を考えられたことが分かる学習感想もあった。

対象生徒の3時間目の授業感想から抜粋

- ・皆の意見で「自分より全体の事を優先すべき」という意見と、「義経のプライドがあるから」という意見は非常に勉強になった。-⑲

⑲からは、読みの交流で出会った新しい考えや自分と異なる考えを生かして、自分の考えをさらに深められたことが伺える。

以上より、授業後の漢字の選択理由には本単元の学びの記述が見られなかった生徒も、各授業時間の学習感想を見ると、選択理由に本単元の学びの記述があった生徒と同じように学びがあったことが分かる。

9. 終わりに

本研究では生徒が学びを自分事として捉えられるように「言葉にこだわって古典を読む」

ことと「自己認識の在り方を問う」ことの2つの側面から、古典に対する生徒の苦手意識を減らすための授業づくりを行った。この2つに加えて、実際に生徒が体験する活動や読みの交流を取り入れることによって、さらに生徒が学びを自分事として捉えられるようになることを考える。また、年間を通して段階的かつ継続的に生徒が学びを自分事として捉えられる古典授業を行うことによって、生徒の苦手意識に良い影響を与えられるのではないかと考えている。本授業実践だけでは生徒全員の古典への苦手意識を払拭するまでには至らなかったが、「平家物語」扇の的においては生徒が自分事として考えられるようにすることができた。

謝辞

本研究のために、多大なるご協力とご支援を頂いた実習校の校長先生・国語科の先生方・学年学級の先生方・生徒の皆さん、そして、ご指導くださった長谷川千秋先生に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・加藤郁夫 (2010). 日本語の力を鍛える「古典」の授業. 明治図書出版.
- ・国立教育政策研究所. 平成 25 年度 全国学力・学習状況調査 報告書 質問紙調査.
- ・須貝千里 (2017). 世界観認識として、「予測困難な時代」を問い直して—「資質・能力」としての〈第三項〉論と「故郷」(魯迅)の「学習課題」の転換—. 日本文学, 第 66 号.
- ・田中実 (1997). 読みのアナーキーを超えていのちと文学. 右門書院.
- ・田中実 (2001). 消えたコーヒーカップ. 社会文学, 第 16 号.
- ・三角洋一 松尾葦江 島内裕子 (2006). 放送大学教材 日本の古典—散文編. 放送大学教育振興会.
- ・文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領国語編.